

日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日2024年 3月 6日

期 間	2023年度	配分額	187千円
フリガナ	オザキ メグミ	在籍研究科 専攻・学年	文学研究科 日本文学専攻 博士課程後期 3年次
氏 名	尾崎 めぐみ		
指導教員氏名	山口 俊雄	指導教員 所属・職名	文学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	上橋菜穂子作品研究——自然と共生する先住民について——		

1. 研究成果の概要

*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。（様式改変・追加不可。以下同様）

本研究は、上橋菜穂子の作品にみられる「自然と共生する先住民」のイメージについて明らかにし、環境問題を扱う作品という観点から日本児童文学内における彼女の作品の位置づけを試みた。デビュー作『精霊の木』（偕成社、1989）は、環境破壊による地球の滅亡によって中央太陽系の惑星コロニーに移住した人類と移住先の惑星の先住民の対立を巡る物語である。この作品では先住民問題と環境問題が強く結びつき、先住民は「自然との共生」というイメージのもとに描かれている。こうした傾向は、文化人類学者としての一面をもつ作者が実際に先住民の人々と触れ合う中で起きた意識の変化によって2作目以降弱まっていくが、完全に消滅することはなかった。その要因を探るため、日本の環境教育の変遷を辿りつつ、環境問題をテーマとした児童文学作品と上橋作品との比較を行う。

2. 今年度の研究報告

*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的 ②研究の方法 ③研究成果・今後の展望

①研究の目的

児童文学作家上橋菜穂子は文化人類学研究者としての一面を持ち、特に先住民問題に対する問題意識は作品に強く出ている。デビュー作『精霊の木』は、環境破壊で地球に住めなくなり、中央太陽系の惑星コロニーに移住した人類と移住先の惑星の先住民の対立を巡る物語である。この作品では先住民は「自然と共存しながら生きる人々」というイメージが強調されて描かれている。『精霊の木』以降の作品でも上橋は先住民を描いているが、「自然と共存しながら生きる人々」というイメージは作品を追うごとに薄れていく。これには『精霊の木』刊行の1年後、上橋が文化人類学のフィールドワークでオーストラリアに滞在し、現地の先住民アボリジニの人々と交流を行ったことが深く関わっている。

本研究の目的は、上橋菜穂子の作品にみられる「自然と共生する先住民」のイメージについて明らかにし、環境問題を扱う作品という観点から日本児童文学内における彼女の作品の位置づけを試みることである。この研究を行うことにより、環境教育に関する施策が児童文学に与えた影響や、環境教育の際に児童文学作品を活用することの効果や利点についても明らかになっていくことが予想される。

②研究の方法

(1) 上橋作品の精読及び再考

環境問題に関する意識が作品内に強く出ている『精霊の木』『月の森にカミよ眠れ』（偕成社、1991）を中心に作者自身が開示した情報や既存の読みから距離を取ることで新たな読みの可能性を探る。

(2) 日本児童文学における「環境問題」というテーマをめぐる状況についての調査

日本児童文学を扱う雑誌の環境問題に関する記事を収集し調査を進めていく。

(3) 上橋菜穂子の最新作『香君』（文芸春秋、2022）の調査

上橋の他作品との比較を通して上橋作品全体における本作の位置づけを明らかにし、さらに、本作のキーワードである「稲」について扱った作品を収集し、本作と比較することによって本作及び上橋作品の独自性を明らかにする。

今年度の研究報告（つづき）

③研究成果・今後の展望

今年度は「②研究の方法」の「（1）上橋作品の精読及び再考」、「（3）上橋菜穂子の最新作『香君』（文芸春秋、2022）の調査」を中心に研究を進め、その成果を学会で報告した。

まず「（1）上橋作品の精読及び再考」について、上橋は自著のエッセイやインタビューなどで自身の著作について言及しており、その発言を参考にしつつ論の組み立てを行ってきた。しかし、日本女子大学国語国文学会秋季大会（2021年12月4日、日本女子大学）で発表した際に作中に作者の意図せざるもの、また、作者が読者に開示していないものがないか再考すべきとの指摘を受けた。そのため、今年度は環境問題に関する意識が作品内に強く出ている『精霊の木』『月の森にカミよ眠れ』を中心に作者自身が開示した情報や既存の読みから距離を取ることで新たな読みの可能性を探った。

その結果、先行研究では指摘されてこなかった作品の繋がりを明らかにすることができた。第1作『精霊の木』と第2作『月の森に、カミよ眠れ』が現実社会を題材として書かれた作品であったのに対し、第3作『精霊の守り人』（偕成社、1996）が架空の世界を題材としたファンタジー作品であったため、上橋の初期2作品と『精霊の守り人』をはじめとした〈守り人〉シリーズの繋がりは論じられてこなかった。しかし、研究の結果、『精霊の木』と『月の森に、カミよ眠れ』に共通して描かれていた自然と文明の狭間で葛藤する人間の姿は〈守り人〉シリーズでも描かれており、環境問題に対する意識、そして、文明社会が孕む問題を相対化させうるものとして自然を描くという作者の姿勢は初期2作品から〈守り人〉へ継承されていたということが明らかになった。この結果は日本児童文学学会第62回研究大会にて発表した。

続いて「（3）上橋菜穂子の最新作『香君』（文芸春秋、2022）の調査」について、『香君』は植民地支配の要となる植物「オアレ稲」が収穫量の増加や育成の効率化などを求め改良を施された結果、虫害を引き起こし帝国に危機を及ぼすという内容で、児童文学作品ではないものの上橋の最新作であり、また環境問題に対する現在の意識を把握するうえで重要な作品であるため調査を行った。

『香君』の虫害の描写が本作にもたらす効果について調査したところ、本編に詳細に描かれる虫害の恐怖は人類が外来植物を無計画に栽培し生態系を破壊することへの警鐘を促す効果があるとともに、それを異世界の昆虫や植物を用いて描くことによって自由な思考実験的を可能にしていることが明らかになった。『香君』も〈守り人〉シリーズと同じように架空の世界を舞台とした作品だが、外来植物の栽培および栽培効率化のための改良は現実社会でも行われていることである。しかし、そのデメリットについては研究途上ということや紙面の制約からあまり提示されていない。『香君』は外来植物に関する問題をファンタジーとして描くことによって効果的に読者にデメリットを提示しているといえよう。

今後は、今年度の研究成果を論文の形式にまとめ、最終的には博士論文に組み込むことを目標としている。

3. 成果発表（投稿中も含む）

＊研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

①なし

②

1,尾崎めぐみ「上橋菜穂子『香君』研究—架空の生物がもたらす効果について—」（日本社会文学会関東甲信越ブロック8月オンライン例会、2023年8月20日、オンライン）

2,尾崎めぐみ「上橋菜穂子作品研究—自然と文明、『守り人』シリーズを中心に—」（日本児童文学学会第62回研究大会、2023年11月19日、武蔵野大学）

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

尾崎 めぐみ

日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年 3 月 8 日

期 間	2023年度	配分額	50千円
フリガナ	シュウコウ	在籍研究科	文学研究科
氏 名	周 浩	専攻・学年	日本文学専 攻 博士課程後期 3 年次
指導教員氏名	衣川 隆生	指導教員 所属・職名	文学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	日中母語場面および接触場面における自由会話の重なりについて		

1. 研究成果の概要

*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。（様式改変・追加不可。以下同様）

本年度の研究では2023年2月に収集した日中母語場面における初対面の2者と初対面の3者による自由会話のデータを用い、分析を行った。日中母語場面の自由会話における発話の重なりにより、話者間の発話権がどのように交替しているのか、その実態を分析した。また、発話の重なりを分類し、どのような発話の重なりが発話権交替をもたらすのかを考察した。その後、具体的な会話例を提示しながら、日本語母語場面と中国語母語場面における発話の重なりによる発話権交替の特徴をまとめた。

2. 今年度の研究報告

*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的 ②研究の方法 ③研究成果・今後の展望

① 研究の目的

本研究は、日本語教育における会話指導への応用を目指して、人間関係を築くために重視されている「自由会話」に注目する。日本語母語場面と中国語母語場面、また日中接触場面の自由会話で生じた発話の重なる機能、また発話の重なり後、話者の発話権がどのように交替するのかを基準とした分類を提示し、日本語母語場面と中国語母語場面における発話の重なるの特徴を検討する。さらに、母語場面と接触場面における発話の重なるの異同について考察したい。これらを明らかにすることによって、今後中国語母語話者を対象とした会話教育に対して新たな提言を行う。

そこで、本年度の研究は以下の2つの課題を設けた。

- ①発話の重なり後、発話権奪取が行われるか、発話権維持が行われるか、または発話権競合が行われるか。
- ②発話の重なりを分類し、どのような発話の重なるの場合に発話権交替が成功するか。

②研究の方法

1. 日中母語場面の自由会話における話者の発話の重なり後、後話者が前話者から発話権を奪取するか、前話者が自分の発話権を維持か、あるいは2人以上の話者の同時発話による発話権を競合するかを基準とし、発話者の発話権交替を「発話権奪取」、「発話権維持」、「発話権競合」に分類する。
2. 発話の重なりについては、本田（2016）を援用し、「早すぎ」、「同時発話」、「先取り」、「割り込み」の4種類に分類する。
3. 上記1、2の分類に基づき、発話権交替が成功した発話の重なるの特徴をまとめる。

今年度の研究報告（つづき）

③研究成果・今後の展望

本年度の研究では、日中母語場面の自由会話における発話の重なり後、後話者による発話権奪取、前話者による発話権維持、2人以上の話者の同時発話による発話権競合がどのように起こるか、また発話の重なりの種類に基づいて発話権交替が成功する条件について分析した。

分析の結果、まず、発話権交替については、日本語母語場面と中国語母語場面における「発話権維持」、「発話権奪取」、「発話権競合」の出現頻度の割合に差がないことが分かった。「発話権維持」、「発話権奪取」また「発話権競合」の出現頻度を加算し、検定を行った結果、「発話権奪取」は「発話権維持」より有意に多く、「発話権維持」は「発話権競合」より有意に多かった。「発話権奪取」、「発話権維持」、「発話権競合」という順で発話権交替が行われていることが分かった。つまり、どちらの母語場面でも発話の重なり後、「発話権奪取」が最も頻度が高いことが明らかになった。また、「発話権奪取」が成功した発話の重なりの中で、どちらの母語場面でも「割り込み」と「早すぎ」が多いことが分かった。「割り込み」による発話の重なりが生じた場合、先行発話が言いさしのままで終了してしまうことが両場面では共通であった。しかし、日本語母語場面では、「割り込み」は先行発話の内容を繰り返すか、後話者が話題を変更しようとする手段として使用され、中国語母語場面では、「割り込み」は話題を変更せず、以前の発話に関連する内容や情報を共有するために使用された。「早すぎ」による発話の重なりについて、日本語母語場面では前話者が発話の後に情報を付加することで頻繁に生じた。一方、中国語母語場面では先行発話への応答、情報補充、情報確認などに見られた。

以上の結果に踏まえ、まず、日本語母語場面と中国語母語場面では「発話権奪取」が最も頻繁に行われ、「発話権競合」が最も少ないことから、両母語場面における発話権交替が共通の特徴を持っていると考えられる。また、両母語場面では、「割り込み」による発話の重なりは先行発話に阻害の影響を与えてしまう、つまり、前話者の発話権を阻害する場合があると言える。さらに、日本語母語話者は前話者の発話権を奪うのではなく、前話者の発話の終了部分を間違えて、前話者の発話と重なる傾向があるのに対して、中国語母語話者は意図的に発話権を奪い、情報確認や情報提供などを行う傾向があると推測できる。

以上のような特徴を日本語教育現場で、発話の重なりは発話権を取得する手段として使用されていることを提示することができる。また、中国語母語話者が接触場面で中国語母語の特徴を用いると誤解を生む可能性があることも示唆できる。しかし、今年度の研究で分析した会話データは2つのみであり、研究結果は一般化することが難しい。今後は他のテーマの自由会話を継続的に調べ、初対面会話また接触場面の自由会話も同じ特徴があるかを分析したい。

3. 成果発表（投稿中も含む）

*研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

①なし

②「日中母語場面における発話の重なり後の発話権交替に関する考察」、国語国文学会大会 2023年11月25日 日本女子大学

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

周 浩

日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年 3月 8日

期 間	2023年度	配分額	183千円
フリガナ	コンドウ シオリ	在籍研究科 専攻・学年	文学研究科 日本文学専攻 博士課程後期 1年次
氏 名	近藤 史織		
指導教員氏名	渡部 麻実	指導教員 所属・職名	文学研究科 教授
研究課題名 ※40字以内	文芸復興期の私小説 ―宇野浩二の文学を例として		

1. 研究成果の概要

*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。（様式改変・追加不可。以下同様）

本研究では、従来、素材研究に偏りを見せていた宇野浩二『枯木のある風景』（「改造」1933年）の中身に焦点を当て、末尾の一文の追加が小説全体に与える効果と、作中の〈芭蕉風〉という表現が意味するものについて考察した。前者では、本作が画家の在り方に私小説家の姿を重ねており、芥川龍之介の自殺に起因する芸術家の死に対する意識が描き込まれていることが明らかとなった。後者では、古泉圭造が発する〈芭蕉風〉という表現が「写実と空想の混合酒」を示しているという点で、近代文学における芭蕉受容の一般的なイメージとは乖離した独自の解釈である可能性を指摘した。本作は、小出檜重や鍋井克之といった著名な画家をモデルとした作品である上に、宇野の文壇復帰一作目としても注目されるが、今年度の研究ではそれらの外部情報からは距離を置いて小説を読み返すことにより、新たな解釈の提示を試みた。

2. 今年度の研究報告

*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的 ②研究の方法 ③研究成果・今後の展望

①研究の目的

『苦の世界』（聚英閣、1920年）や『蔵の中』（「文章世界」1919年）に見られる饒舌な語りが注目を浴び、文壇での評価を得た宇野浩二の文学は、その代表作のほとんどが初期の文学活動の中で生まれている。しかし、後年の長編小説『思ひ川』（「人間」1948年）が読売文学賞を受賞するなど、宇野の文学活動は大正から昭和にかけて長きに渡っている。そして、それを前期と後期に二分する分岐点として位置付けられるのが1927年の発病だ。文壇復帰後の宇野は初期の饒舌体を捨て、作中の言葉の意味さえも鍵括弧を用いて指定していくストイックな文体を確立したというのが従来の見解であった。本研究は、この前提となる宇野文学の発病による二分に疑問を呈するところから始まっている。文体の上での大きな転換とは別に、一貫して受け継がれるテーマがあったのではないかと。そもそも文体の変化は発病に理由を求めてよいのか。これまで空白となっていた転換期の宇野文学に焦点を当てることを目的に、今年度は文壇復帰一作目にあたる『枯木のある風景』の解釈を試みた。

②研究の方法

末尾の一文において島木新吉が「枯木のある風景」よりも「裸婦写生図」に一層の敬意を表している点に着目し、島木の中に構築された画家・古泉圭造のイメージを掴んだ。その上で、本作のタイトルには「裸婦写生図」ではなく「枯木のある風景」が選択された理由を考察した。次に、視点を古泉の発言に移し、作中に登場する〈写実〉〈空想〉〈象徴〉という言葉に着目し、それらが如何に使い分けられているかを整理した。古泉が用いた〈芭蕉風〉という表現については、久保田晴次『芭蕉受容の研究』（桜楓社、1974年）を参照し、日本近代文学における芭蕉受容の概要を押さえた上で、そこからのずれに注目した。なお、小説の中身からは外れるが、古泉のモデルとなった画家・小出檜重の関連書籍の調査を宇野の蔵書と照らし合わせながら行った。

今年度の研究報告（つづき）

③研究成果・今後の展望

■ 研究成果

今年度の研究によって明らかとなったのは以下の三点である。一つ目に、作中の古泉像は島木の捉えた古泉の姿にほかならず、そこには多分に島木の独断と偏見が含まれているということだ。「裸婦写生図」に一層の敬意を示す末尾も他の画家たちとは異なるものであり、古泉像は八田弥作や入井市造といった周辺人物の見解も踏まえた上で捉え直す必要がある。二つ目に、作中には古泉の随筆としてモデルとなった小出楢重の随筆がほとんどそのままの形で引用されるが、小出の主張の一部は古泉ではなく島木に引き継がれているということだ。この明らかな虚構からは、阪神間モダニズムの空気に入る古泉の在り方がより鮮明に見えてくる。三つ目は、古泉の捉える〈芭蕉風〉が「写実と空想の混合酒」という点でこれまでの近代文学における芭蕉受容とは異なる可能性だ。〈混合酒〉という在り方は、従来の二項対立的な〈写実〉と〈象徴〉の捉え方を一新するものであったと考えられる。これらを更に発展させるにあたり、以下に今後の展望を記す。

■ 今後の展望

【芭蕉における〈写実〉〈空想〉〈象徴〉】

既出の久保田論を参照した結果、古泉の芭蕉観は「写実と空想の混合酒」という点でこれまでの芭蕉受容の在り方とは異なる可能性が見えてきた。しかし、久保田論が近代文学における芭蕉受容の全体を網羅しているとは言い難く、古泉の芭蕉観と同時代との間にどれほどのずれが指摘できるのかについては、更なる調査が必要であると考え。作中に示された〈写実〉〈空想〉〈象徴〉というキーワードが芭蕉と共にどのように用いられているかについて、今後は作品発表年の前後に範囲を限定して明らかにしていく。

【絵画における〈写実〉〈空想〉〈象徴〉】

今年度の研究では、「裸婦写生図」が自画像を描こうとした作品である点に着目し、古泉に私生活を描く私小説家との共通点を見出した。しかし、古泉＝私小説家とするには手続きが不十分であり、まずは本作に描かれた人物が全て画家であるという前提に意識を向ける必要がある。〈写実〉〈空想〉〈象徴〉は、芭蕉と共に用いられる言葉でもあるが、絵画の文脈ではどのように用いられてきたのか。この点について洋画受容の概要を押さえると共に作品発表年の前後に限定した調査を行いたい。

➡今年度は、特定の言葉が作中で如何に用いられているかを、その言葉を発した人物の特性を踏まえながら詳細に分析した。しかし、同時代の文学の場における言葉の使用例や絵画の場における使用例などの調査は不十分である。同時代における〈写実〉〈空想〉〈象徴〉の言葉の定義が明確になったところで、初めて本作における認識の歪みが明確になると考えられる。今後は更に時期を限定した調査を進めていきたい。また、同時に『枯木のある風景』論を文芸復興期の宇野文学という大きな流れの中に位置づけるため、宇野浩二論や私小説論など、個々の作品に限定しない研究動向についても調査を継続していく。

3. 成果発表（投稿中も含む）

*研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

①

・尾崎めぐみ・片木晶子・近藤史織・関朱夏・竹中清音・秦野桃子・李娜娜・龍玥茗・山口俊雄「石川淳「いすかのほし」研究—原稿（影印）と校異—」（「日本女子大学大学院文学研究科紀要」第30号、2024年3月、1－34頁）

・近藤史織「Ⅱ〈化粧する女〉像」（近藤史織・竹中清音・秦野桃子・李娜娜・渡部麻実「明治期「家庭週報」という表現場」（「日本女子大学文学部紀要」第73号、2024年3月、27－54頁））

・「家庭週報」明治期目次データベース作成会編『「家庭週報」明治期総目次』（2024年3月）、編集委員

②

なし

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

近藤 史織

日本女子大学大学院学生特別研究奨励金 成果報告書

記入日 2024年 3 月 11 日

期 間	2023年度	配分額	187千円
フリガナ	サトウ アヤ	在籍研究科	文学研究科
氏 名	佐藤 彩	専攻・学年	英文学専 攻 博士課程後期 1 年次
指導教員氏名	大場 昌子	指導教員 所属・職名	文学研究科・教授
研究課題名 ※40字以内	I.B. シンガー文学におけるマジカルリアリズム		

1. 研究成果の概要

*当該研究の概要を400字程度で簡潔に記述してください。（様式改変・追加不可。以下同様）

シンガー文学におけるマジカルリアリズムに関して、登場人物たちのホロコーストに対する意識や強迫観念という視点から研究を進める内に、彼の作品では、シュテトル(19世紀の東欧において、アシュケナジーユダヤ人が形成していた今はなきコミュニティ)の存在が深く関係していることが分かった。そのため今回の研究では、シュテトルが主な舞台背景として設定されている長編小説『ショーシャ』を扱い、マジカルリアリズムによってどのようにシュテトルが表現されているかについて研究した。具体的には、現実世界を生きながら作中で唯一死者の存在を目にし、過去の記憶の中で死者と共存する人物ショーシャに焦点を当て、彼女が主人公に与える影響、またショーシャをマジカルリアリズムの体現者として描いているシンガーが、何を伝えているかについて考察した。

2. 今年度の研究報告

*図表も含めてよいので、以下の①～③についてわかりやすく記述してください。

①研究の目的 ②研究の方法 ③研究成果・今後の展望

① 研究の目的

超自然主義的な概念を持つハシディズムから派生したマジカルリアリズムとは別に、ホロコーストという非現実的な歴史的事実と向き合うために展開されるマジカルリアリズムもあるのではないかという仮説を置き、登場人物たちのホロコーストに対する意識や強迫観念に焦点を当てることで、シンガー文学における独自のマジカルリアリズムを研究し、その意図を考察する。

② 研究の方法

- まず先行研究の中で、作中のショーシャという人物がどのような存在として考察されているかを研究した。そして、一部の見解に対し疑問を感じたため、より詳しく登場人物を考察することにした。
- ショーシャについての考察を進める内に、彼女がシュテトルを体現する存在として描かれているのではないかと考えたため、シュテトルに関する研究も進めた。また、ショーシャが主人公であるアーロンに作家としての変化をもたらす作用があると考え、登場人物たちの関係性について探究することにした。
- ショーシャがアーロンに与える影響を論考する中で、ショーシャ自身に、シンガーが描くマジカルリアリズムの本質と関係するものがあるという結果に辿り着いた。そして、ショーシャという存在、またショーシャと関わることで変化した主人公から読み取れることを研究した。

今年度の研究報告（つづき）

④ 研究成果・今後の展望

『ショーシャ』に関する先行研究では、大人へと成長しているはずのショーシャが精神的にも肉体的にも変化していないことから、変化を伴う社会に対し適応できず排除される存在であり、そのような彼女の状態が欠点であると研究されている。しかし、主人公の記憶から消えかけていたシュテトルで、亡くなったはずの人々と記憶の中で共に生き、一瞬たりとも彼らの存在を忘れないショーシャの姿勢は、忘却という死を防ぎ、記憶における消滅という死に抵抗する必要性を、主人公に伝える重要な核として機能するという発見に至った。

それゆえシンガーは、この世を生きた人々は記憶され、宇宙のどこかで永遠に生き続けるであろうという理念を彼の文学的本質としており、マジカルリアリズムの体現者であるショーシャというキャラクターにその本質を組み込んでいるのではないかという結論に至った。そして、アーロン（主人公）をシュテトルという世界を再興する使命を担う作家に位置付けることで、シンガーは作家として、ホロコーストによって消えてしまった今はなきシュテトルとその同胞への想いをつむいだ世界を、自身の文学作品に反映させているだろうという成果が得られた。

マジカルリアリズムを考察する中で、シュテトルがシンガー文学と深く関連しているということを発見し、文学の中でその空間を再興することを本質としているという点に興味を持ったので、彼が文学上でどのようにシュテトルを構築しているのかという研究を深めたい。また、今回はホロコースト前の時代におけるシュテトルの考察を行ったが、引き続きホロコースト前におけるシュテトルの表象も研究しつつ、ホロコースト後における新天地でのシュテトルの表象が、どのように再興されているのかという研究も進めていきたい。

3. 成果発表（投稿中も含む）

＊研究経過・研究によって得られた成果を発表した①～②について、該当するものを記入してください。ない場合は「なし」と記入してください。

①雑誌論文、図書（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

②学会・シンポジウム等での発表（会名、開催日、開催場所）

① なし

②佐藤 彩、「『ショーシャ』におけるシュテトルの表象」、日本ユダヤ系作家研究会、2024年3月16日(土)、ノートルダム清心女子大学(岡山県)

※この報告書はホームページで公表されます。

採択者氏名

佐藤 彩